金聖響

きむ・せいきょう

そのイメージを一言に例えるなら「やんちゃな青年」おおよそ、いわゆる指揮者とは縁遠い言葉で語られる新進気鋭の若手指揮者・金聖響が垣間見せる自分自身の在り方

The Real Face

金聖響（きむ・せいきょう）

'70年大阪生まれ。ボストン大学哲学科卒業後、ニューイングランド音楽院大学院指揮科博士課程修了。その後、タングルウッド音楽祭指揮科のフェローシップとして、小澤征爾、ロバート・スパーノ、クスタフ・マイヤーの各氏に師事。'96年に渡欧後は、数々のコンクールで受賞を果たす。ここ数年で日本の主要オーケストラに次々とデビュー。

Information

京都市交響楽団・関西二期会第56回オペラ公演「コジ・ファ ン・トゥッテ」
■日時　02年5月25日（土）18:00～　26日（日）14:00～
■会場　尼崎市総合文化センター アルカイックホール
■問い合わせ先　関西二期会事務局（06-6445-2823）

京都市交響楽団・京都市交響楽団オペラ公演「コジ・ファン・トゥッテ」
■日時　02年5月27日（月）18:30～ ■会場　京都会館第一ホール
■問い合わせ先　京都市交響楽団（075-222-0331）

大阪フィルハーモニー交響楽団「ザ・シンフォニーホール特選コンサート Vol.3」
■日時　02年6月23日（土）15:00～ ■会場　ザ・シンフォニーホール
■問い合わせ先　ザ・シンフォニーホール（06-6453-6000）

京都市交響楽団「金聖響&藤井香織が贈るモーツァルトのタベ」
■日時　02年7月13日（土）19:00 ■会場　京都コンサートホール（大ホール）
■問い合わせ先　京都音楽協会ミューズ（075-441-1567）

根底に息吹くのはクラシック この瞬間の切り取り方

3才でピアノ、7才でヴァイオリンを学び、後に指揮者を志す。「なれると信じてた。それが現実になったのは、どれだけ強く思っていたかでしょ」。時に尊大とも思える発言は、さらりと言ってのけるだけ自信の裏打ちでもある。「僕なんて…って言ってる様振り（指揮者）を誰が呼んでくれるの？」と言う、その目には力がこもる。「本番が面白い。音楽が怖いけれど面白い。わかっていても、ずずーんって来る瞬間がある。客にどう聴こえるかなんて、先に考えなくていい。僕らが満足できて良いもんが出来てるかが重要。結果はある程度想定するけど、良いもんを目指せば目すと付いてくる」と言い切る。

一方で、昨年はテレビの深夜放送で「クラシック解体新書」と題した番組にも自ら出演した。「僕に出来ることは、音楽ってこんな凄いもんやでって引きずり込むために、いい音楽家であること。演奏会へ足を運んでもらうきっかけを作ること」と、下の世代、クラシックが身近にない世代へと裾野を広げる活動も行う。

パラドックスを抱え、相反するかのような両側面。矛盾を内包しつつ世の中が成り立つように、どちらも今の金聖響に間違いない。

解釈・忠実さは不必要 譜面の空間を読みとる力

所々書き込みがなされ、程良くこなれた楽譜。「この中においしいもんが、いっぱい隠れてんねん」と譜面を指しながら奏う。演奏が決まった時から常にバッグの中、指揮棒を振っているよりもずっと長い時間接する楽譜は、「本と一緒。本を読んで気になったところには、丸したり線引いたりするでしょ」。作曲家の意図を垣間見た部分、気になる箇所思いつき…。拾い上げた「おいしいもん」を咀嚼して、金聖響の指揮が形成されてゆく。

しかし「解釈という言葉は凄く危険」と言うのが彼の常日頃からの主張だ。「これを書いた人間がどんな思いや意図で書いたかは、常に探していかなあかん」けれど、「個人的な思いを入れるのはとても危険」なことだと。逆に「忠実な演奏も危険」だと言う。指揮をするというのは、新たな芸術を生み出すのではない。「作曲家が一番偉くって、指揮者は再現芸術家。曲がなければ存在しないのだから…」。では指揮者の存在価値は、一体どこにあるのか？　作曲家自身の個性と人生を捉え、どの時代にどんな思いで創り上げたかを把握、五線紙の中に潜む思惑と感情を汲み取る。その力こそ、指揮者に要求されるもの。金聖響の力量として問われるものだ。

そもそも指揮とは、楽器のように学んで身に付くものではない。自分というフィルターで解釈をし、譜面を再現するために試行錯誤する「どっか職人みたいなもん」であり、その技術は「盗むしかない」という。

偉大な存在であり、「TVで見て「格好いい」と憧れた」小澤征爾氏は、自分と呼吸を合わせるように、とオーケストラを導いた。同時に同じ深さで呼吸すれば、次に出る音が同じであり、指揮者が決める呼吸の質によって、音の質感は全く変わってくると言うのだ。事実、アンサンブルでは音がずれることもあるが、その歪みが逆に波を引き起こし、ぞくぞくっとするほどの演奏を生み出す。「以前師事していた頃、ピアノと弦楽器だけの5～6人のアンサンブルの音を合わせてみるように言われたんですけど、結局息の吸い方云々なんですよ。凄いのは『あかん、あかん』って、目の前で10種類くらいの違うやり方を見せてくれたこと」。

またある時。「朝比奈隆先生のアシスタントを務めた時に、オーケストラの中で聴こうと思って邪魔にならんように、最後列の後ろにそっと立った。驚くことに『トランペットの出方が半端やなく早い。「えっこんなんでええの？」って、客席側に戻って聴いたらドンピシャ』。7m～10mあるというステージでは、音にタイムラグが生じる。それを踏まえ「上手いやつは、早吹きしよる」のだ。オーケストラに対する的確な要求は、質の高さとなって返ってくる。

時に感銘を受け、時に悔しがり、時に試行錯誤する環境。いわゆる「習う」のではない勉強の場を、逃さず積み重ねて来た。時間と空間の芸術であるオーケストラは、常に流動的かつ生きているもの。何度練習しても、同じものにはならないが、そのクオリティは指揮者の手に委ねられているという実感。それらは一つ残らず、金聖響に染み込んでゆき、最新の舞台へと繋がっている。

パーソナルな素養の土壌 削ぎ落とされた中にみる力

練習中、金聖響ははとんど声を荒げることはなかった。その姿を垣間見せてもらったのは、京都大学交響楽団の定期演奏会。「少し大きめに弾いてもいい。そのほうが自信がつくしな」「本番が始まったら、真新しくやると思って」。的確ではあっても、否定的な言葉はついぞ聞かれないし、まして怒鳴るでもない。それは意識的なもの？　「言い方ひとつで壊を作ってしまったら、本質に迫り着かないでしょ」。計算と言い切ってはあざといだろうか、一見飄々として見える姿。それは、いかに形作られて来たのか？

その名前からもわかる通り、金聖響は韓国籍を持つ在日韓国人である。大阪に生まれ育ち、11才で渡米。以後、27才で日本へと再び戻って来るまでをアメリカで過ごして来た。「日・韓・米という3つが僕の中に混在している。『俺、アメリカ人やし』って口をついて出る時もあれば、『関西人ベタベタやな』って思う時もある。それぞれに考え方が全く相反する時もあるけど、環境によって変わる3つの要素を持って、瞬間瞬間で素直に生きていればいい。普段はグレーな部分で心地よいと思っていても、必要不可欠な判断はちゃんとするから」。そこに気負いは全くないし、本質を見失わないことこそが重要という芯がしっかり存在する。

もちろんそんな彼にとって、東京だから関西だから、という判断基準は意味を持たない。ただ、年に何度かのペースで訪れる京都は、出身地・大阪よりも好きだと言う。「その街が好きかそうじゃないかは、そこに住んでる人達が自分にとってどういう存在か、大事にしなあかん人がどれだけいるか。自分の会いたい人がいればいる程好きになる。東京は住んでて、色んな意味で便利は便利やけど、うまいもんもないし（笑）」。地名という記号では判断されない、パーソナルを軸にした考え方は、ここにも現れる。

そして、近頃加えられたのは「指揮者」というパブリックな面の彼自身。以前は「棒を振らん時は、指揮者ちゃうって思ってた」けれど、ここ最近は「指揮者・金聖響という看板を背負わなきゃならないことは否定できないし、そこで人に及ぼす影響力を意識して言葉を選ぶようになった」と言う。

無駄な贅肉が削ぎ落とされ、シンプル極まりない「自分」という存在の在り方。そこに肉付けされてゆくのは、自分を信じた目で選び取った要素。その見極め方は非常に厳しく、ゆえに時間はかかるのかもしれない。が、そこに形成されるのは、まさに金聖響でしか成し得ないものだ。

取材・文／大和まこ（本誌）　撮影／高橋章夫